

# ON TORSION PAIRS ON TRIANGULATED CATEGORIES

中岡 宏行 (HIROYUKI NAKAOKA)

ABSTRACT. 三角圏上のねじれ対を用いたアーベル圏の構成について講演を行いましたので、報告致します。ねじれ対によるアーベル圏の構成は  $t$ -構造のハート、クラスター傾部分圏による剰余を同時に一般化するものです。前半はこの紹介です。

後者のクラスター傾部分圏による剰余は、Krull-Schmidt な三角圏において Buan と Marsh による一般化がなされました。後半ではねじれ対の概念をペアに拡張して、一般の三角圏上で Buan と Marsh の構成も含む構成を与えます。

## 1. 導入と準備

三角圏からアーベル圏を生み出すものとして、 $t$ -構造とクラスター傾部分圏が挙げられる。三角圏  $\mathcal{T}$  上の  $t$ -構造  $(t^{\leq 0}, t^{\geq 0})$  が与えられると、このハート  $t^{\leq 0} \cap t^{\geq 0}$  がアーベル圏となることが [BBD] の頃から知られている。また  $\mathcal{T}$  がクラスター傾部分圏  $\mathcal{C}$  をもつとき、イデアル剰余  $\mathcal{T}/\mathcal{C}$  としてアーベル圏が得られることが 2-Calabi-Yau 三角圏の場合に [KR] により示され、[KZ] により一般の三角圏で実行されている。これらの構成は、ねじれ対 ([IY]) を用いて同時に一般化される。

クラスター傾部分圏による剰余をとる構成は Buan と Marsh により、 $\mathcal{T}$  に対する適切な仮定のもとリジッドな対象  $T \in \mathcal{T}$  を用いた剰余  $\mathcal{T}/\text{add}(T)^{\perp}$  へと拡張されている ([BM])。本稿の後半では、ねじれ対を用いた構成をペアに拡張することで、Buan と Marsh による構成を一般の三角圏上で議論する。

記号の準備.

- (i) 圏  $\mathcal{C}$  に対して。  
 $X$  が  $\mathcal{C}$  の対象のとき  $X \in \mathcal{C}$  と表す。 $X, Y \in \mathcal{C}$  に対し、 $X$  から  $Y$  への射集合は  $\mathcal{C}(X, Y)$  で表す。なお、本稿で登場する圏は全て加法圏。
- (ii) 加法圏  $\mathcal{A}$  に対して。  
加法圏の部分圏としては、同型と直和因子で閉じた充満加法部分圏のみ扱う。 $\mathcal{X}, \mathcal{Y} \subseteq \mathcal{A}$  が部分圏のとき、任意の  $X \in \mathcal{X}, Y \in \mathcal{Y}$  に対し  $\mathcal{A}(X, Y) = 0$  となることを  $\mathcal{A}(\mathcal{X}, \mathcal{Y}) = 0$  と略記する。 $\mathcal{A}(\mathcal{X}, Y) = 0$  や  $\mathcal{A}(X, \mathcal{Y}) = 0$  も同様。また  $\mathcal{X}$  の右直交部分圏  $\mathcal{X}^{\perp} \subseteq \mathcal{A}$  は、 $\mathcal{A}(\mathcal{X}, Y) = 0$  を満たす  $Y \in \mathcal{A}$  のなす充満部分圏として定義する。左直交部分圏  ${}^{\perp}\mathcal{Y} \subseteq \mathcal{A}$  も同様に、 $\mathcal{A}(X, \mathcal{Y}) = 0$  を満たす対象のなす部分圏とする。
- (iii) 三角圏  $\mathcal{T}$  に対して。  
 $\mathcal{T}$  のシフトは [1] で表す。対象  $X, Y \in \mathcal{T}$  に対し、 $\mathcal{T}(X, Y[1])$  を  $\text{Ext}^1(X, Y)$  と表記する。これに沿い、 $\text{Ext}^1(\mathcal{X}, \mathcal{Y}) = 0$  は  $\mathcal{T}(\mathcal{X}, \mathcal{Y}[1]) = 0$  の意味で用いる。 $\text{Ext}^1(\mathcal{X}, Y) = 0$  や  $\text{Ext}^1(X, \mathcal{Y}) = 0$  も同様。  
部分圏  $\mathcal{X}, \mathcal{Y} \subseteq \mathcal{T}$  に対し  $\mathcal{X} * \mathcal{Y}$  を、ある  $X \in \mathcal{X}, Y \in \mathcal{Y}$  による完全三角形への分解  $X \rightarrow T \rightarrow Y \rightarrow X[1]$  を有する対象  $T$  のなす部分圏とする。

## 2. 三角圏上のねじれ対

以下  $\mathcal{T}$  は三角圏とする.  $t$ -構造とクラスター傾部分圏の定義は以下のようであった.

**定義 2.1** ([BBD]).  $\mathcal{T}$  の部分圏の対  $(t^{\leq 0}, t^{\geq 0})$  が  $t$ -構造 ( $t$ -structure) であるとは, 以下の条件を満たすときをいう.

- (i)  $\mathcal{T}(t^{\leq -1}, t^{\geq 0}) = 0$ .
- (ii)  $\mathcal{T} = t^{\leq -1} * t^{\geq 0}$ .
- (iii)  $t^{\leq -1} \subseteq t^{\leq 0}$  かつ  $t^{\geq 0} \subseteq t^{\geq -1}$ .

ただし  $t^{\leq -1}, t^{\geq -1}$  はそれぞれ, 与えられた部分圏のシフト

$$t^{\leq -1} = t^{\leq 0}[1], \quad t^{\geq -1} = t^{\geq 0}[1]$$

として定義される.

**定義 2.2.** 部分圏  $\mathcal{C} \subseteq \mathcal{T}$  がクラスター傾部分圏 (cluster tilting subcategory) であるとは, 以下の条件を満たすときをいう.

- (i)  $\text{Ext}^1(\mathcal{C}, \mathcal{C}) = 0$ .
- (ii)  $\mathcal{T} = \mathcal{C} * \mathcal{C}[1]$ .

三角圏のねじれ対は, これらを同時に一般化するものである.

**定義 2.3** ([IY]).  $\mathcal{T}$  の部分圏の対  $(\mathcal{X}, \mathcal{Y})$  がねじれ対 (torsion pair) であるとは,

- (i)  $\mathcal{T}(\mathcal{X}, \mathcal{Y}) = 0$ .
- (ii)  $\mathcal{T} = \mathcal{X} * \mathcal{Y}$ .

を満たすときをいう.

$t$ -構造とは, シフトに関する条件 (定義 2.1 条件 (iii)) を満たすねじれ対に他ならない. また, クラスター傾部分圏はねじれ対の退化したもの ( $\mathcal{X} = \mathcal{Y}[-1]$ ) とみなすことができる.

ねじれ対と本質的に同じ概念であるが, 次節以降でシフトが対称的に振る舞うよう, 本稿では次を用いる.

**定義 2.4.**  $\mathcal{T}$  の部分圏の対  $(\mathcal{U}, \mathcal{V})$  が余ねじれ対 (cotorsion pair) であるとは, 条件

- (i)  $\text{Ext}^1(\mathcal{U}, \mathcal{V}) = 0$ .
- (ii)  $\mathcal{T} = \mathcal{U} * \mathcal{V}[1]$ .

を満たすときをいう. これは,  $(\mathcal{U}, \mathcal{V}[1])$  がねじれ対であることに他ならない.

**注 2.5.**  $(\mathcal{U}, \mathcal{V})$  が余ねじれ対のとき,  $\mathcal{U}$  と  $\mathcal{V}$  は

$$\mathcal{U}[-1]^{\perp} = \mathcal{V}, \quad \mathcal{U} = {}^{\perp}\mathcal{V}[1]$$

により互いに他を決定する.

$t$ -構造およびクラスター傾部分圏との関係は次のようになる.

**例 2.6.**  $(\mathcal{U}, \mathcal{V})$  を余ねじれ対とする.

- (1)  $(\mathcal{U}, \mathcal{V})$  が  $\mathcal{U}[1] \subseteq \mathcal{U} (\Leftrightarrow \mathcal{V} \subseteq \mathcal{V}[1])$  を満たすことと,  $(t^{\leq 0}, t^{\geq 0}) = (\mathcal{U}[-1], \mathcal{V}[1])$  が  $t$ -構造となることは同値.
- (2) 部分圏  $\mathcal{C} \subseteq \mathcal{T}$  がクラスター傾部分圏となることと, 対  $(\mathcal{C}, \mathcal{C})$  が余ねじれ対をなすことは同値.

すなわち,  $t$ -構造は余ねじれ対であってシフト閉条件  $\mathcal{U}[1] \subseteq \mathcal{U}$  を満たすもの, クラスター傾部分圏は  $\mathcal{U} = \mathcal{V}$  を満たすものであり, いずれも余ねじれ対の特殊な場合とみなせる. また,  $t$ -構造と逆向きのシフト閉条件を満たす余ねじれ対は, 余  $t$ -構造 (co- $t$ -structure) とよばれる.

## 3. アーベル圏の構成

以下これまで通り,  $\mathcal{T}$  を三角圏とする. 三角圏上に  $t$ -構造あるいはクラスター傾部分圏が与えられると, 以下のようにアーベル圏が構成できることが知られている.

- (1)  $(t^{\leq 0}, t^{\geq 0})$  が  $t$ -構造のとき, ハート (heart)  $t^{\leq 0} \cap t^{\geq 0}$  はアーベル圏となる ([BBD]).
- (2)  $\mathcal{C} \subseteq \mathcal{T}$  がクラスター傾部分圏のとき, イデアル剰余  $\mathcal{T}/\mathcal{C}$  はアーベル圏となる ([KR],[KZ]).

注 3.1. 一般に, 加法圏  $\mathcal{A}$  の部分圏  $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{A}$  に対し,  $\mathcal{I}$  の生成するイデアルによる  $\mathcal{A}$  の剰余  $\mathcal{A}/\mathcal{I}$  を以下で定義する.

- 対象は  $\mathcal{A}$  の対象と同じ.
- 射集合は, 任意の  $X, Y \in \mathcal{A}/\mathcal{I}$  に対し剰余加群

$$\mathcal{A}/\mathcal{I}(X, Y) = \mathcal{A}(X, Y) / \{f \in \mathcal{A}(X, Y) \mid f \text{ はある } I \in \mathcal{I} \text{ を経由}\}$$

として定義.

このとき  $\mathcal{A}/\mathcal{I}$  も加法圏となり, 自然な関手  $\mathcal{A} \xrightarrow{\text{quot.}} \mathcal{A}/\mathcal{I}$  は加法関手となる.

これらの構成は, 余ねじれ対を用いて同時に一般化される.

定理 3.2 ([N1, Theorem 6.4]).  $(\mathcal{U}, \mathcal{V})$  を  $\mathcal{T}$  上の余ねじれ対とする.  $\mathcal{T}$  の部分圏の列

$$(3.1) \quad \begin{array}{ccccc} & & \mathcal{T}^+ & & \\ & \supseteq & & \supseteq & \\ \mathcal{T} & & & & \mathcal{H} \supseteq \mathcal{W} \\ & \supseteq & & \supseteq & \\ & & \mathcal{T}^- & & \end{array}$$

を  $\mathcal{W} = \mathcal{U} \cap \mathcal{V}$ ,  $\mathcal{T}^+ = \mathcal{W} * \mathcal{V}[1]$ ,  $\mathcal{T}^- = \mathcal{U}[-1] * \mathcal{W}$ ,  $\mathcal{H} = \mathcal{T}^+ \cap \mathcal{T}^-$  により定義する. これらの部分圏  $\mathcal{T}, \mathcal{T}^+, \mathcal{T}^-, \mathcal{H}$  の  $\mathcal{W}$  による剰余を  $\underline{\mathcal{T}}, \underline{\mathcal{T}}^+, \underline{\mathcal{T}}^-, \underline{\mathcal{H}}$  で表す. このとき,  $\underline{\mathcal{H}}$  はアーベル圏となる.

例 3.3.

- (1)  $(\mathcal{U}[-1], \mathcal{V}[1]) = (t^{\leq 0}, t^{\geq 0})$  が  $t$ -構造のとき, (3.1) は

$$\begin{array}{ccccc} & & t^{\geq 0} & & \\ & \supseteq & & \supseteq & \\ \mathcal{T} & & & & t^{\geq 0} \cap t^{\leq 0} \supseteq 0 \\ & \supseteq & & \supseteq & \\ & & t^{\leq 0} & & \end{array}$$

のようになり,  $\underline{\mathcal{H}} = t^{\leq 0} \cap t^{\geq 0}$  はハートに一致する.

- (2)  $\mathcal{U} = \mathcal{V} (= \mathcal{C} \text{ とおく})$  のとき, (3.1) は

$$\begin{array}{ccccc} & & \mathcal{T} & & \\ & = & & = & \\ \mathcal{T} & & & & \mathcal{T} \supseteq \mathcal{C} \\ & = & & = & \\ & & \mathcal{T} & & \end{array}$$

のようになり,  $\underline{\mathcal{H}} = \mathcal{T}/\mathcal{C}$  はクラスター傾部分圏によるイデアル剰余となる.

また, 余  $t$ -構造はこのアーベル圏の消滅で特徴づけられる. すなわち, 余ねじれ対が余  $t$ -構造を定めることと,  $\underline{\mathcal{H}} \simeq 0$  (全ての対象が零対象) とは同値である.

## 4. 随伴性と直交性

この節は、阿部紀行氏との共著 [AN] の内容を含む。\$(\mathcal{U}, \mathcal{V})\$ を余ねじれ対とし、\$\mathcal{U}, \mathcal{V}\$ の \$\mathcal{W}\$ による剰余をそれぞれ \$\underline{\mathcal{U}}, \underline{\mathcal{V}}\$ と表すことにする。いま \$\underline{\mathcal{T}}^+, \underline{\mathcal{T}}^-\$ とあわせて、\$\underline{\mathcal{T}}\$ には 4 つの部分圏 \$\underline{\mathcal{U}}, \underline{\mathcal{V}}, \underline{\mathcal{T}}^+, \underline{\mathcal{T}}^-\$ が得られている。

これらの部分圏の \$\underline{\mathcal{T}}\$ への包含は、それぞれ次の様な随伴関手をもつ。

命題 4.1 ([N1, Corollary 4.4], [AN, Proposition 3.1]). 包含関手に対し、以下のように随伴関手が存在。

- (1) \$\underline{\mathcal{U}} \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}}\$ は右随伴 \$\sigma\_{\mathcal{U}}: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{U}}\$ をもつ。
- (2) \$\underline{\mathcal{V}} \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}}\$ は左随伴 \$\sigma\_{\mathcal{V}}: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{V}}\$ をもつ。
- (3) \$\underline{\mathcal{T}}^+ \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}}\$ は左随伴 \$\tau^+: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{T}}^+\$ をもつ。
- (4) \$\underline{\mathcal{T}}^- \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}}\$ は右随伴 \$\tau^-: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{T}}^-\$ をもつ。

さらに、直交性 \$\underline{\mathcal{U}} \perp \underline{\mathcal{T}}^+\$ および \$\underline{\mathcal{T}}^- \perp \underline{\mathcal{V}}\$ が次のような強い形で存在する。

命題 4.2 ([AN, Corollary 3.2, 3.3, Proposition 3.7, 3.8]). 対象 \$X \in \underline{\mathcal{T}}\$ に対し、次が成立。

- (1) \$X \in \underline{\mathcal{U}} \Leftrightarrow \mathcal{T}(X, \underline{\mathcal{T}}^+) = 0 \Leftrightarrow \tau^+(X) = 0\$.
- (2) \$X \in \underline{\mathcal{V}} \Leftrightarrow \mathcal{T}(\underline{\mathcal{T}}^-, X) = 0 \Leftrightarrow \tau^-(X) = 0\$.
- (3) \$X \in \underline{\mathcal{T}}^+ \Leftrightarrow \mathcal{T}(\underline{\mathcal{U}}, X) = 0 \Leftrightarrow \sigma\_{\mathcal{U}}(X) = 0\$.
- (4) \$X \in \underline{\mathcal{T}}^- \Leftrightarrow \mathcal{T}(X, \underline{\mathcal{V}}) = 0 \Leftrightarrow \sigma\_{\mathcal{V}}(X) = 0\$.

命題 4.1 で得られる随伴関手を合成することで、\$\underline{\mathcal{T}}\$ から \$\underline{\mathcal{H}}\$ へのコホモロジカル関手が構成される。

補題 4.3 ([AN, Proposition 4.2]). 関手の自然同型 \$\tau^+\tau^- \cong \tau^-\tau^+\$ が存在する。ただし \$\tau^+\tau^-, \tau^-\tau^+\$ はそれぞれ

$$\begin{aligned} \underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\tau^-} \underline{\mathcal{T}}^- \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\tau^+} \underline{\mathcal{T}}^+ \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}}, \\ \underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\tau^+} \underline{\mathcal{T}}^+ \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\tau^-} \underline{\mathcal{T}}^- \hookrightarrow \underline{\mathcal{T}} \end{aligned}$$

の合成を表す。

特に、任意の \$X \in \underline{\mathcal{T}}\$ に対し

$$\tau^+\tau^-(X) \cong \tau^-\tau^+(X) \in \underline{\mathcal{T}}^+ \cap \underline{\mathcal{T}}^- = \underline{\mathcal{H}}$$

が成り立つため、これらは \$\underline{\mathcal{H}}\$ への関手とみなせる。

定理 4.4 ([AN, Theorem 5.7]). \$\underline{\mathcal{T}}\$ を三角圏、\$(\mathcal{U}, \mathcal{V})\$ を \$\underline{\mathcal{T}}\$ 上の余ねじれ対とする。関手の列

$$\underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\text{quot.}} \underline{\mathcal{T}} \xrightarrow{\tau^+\tau^-} \underline{\mathcal{H}}$$

の合成を \$H\$ とすると、これはアーベル圏 \$\underline{\mathcal{H}}\$ へのコホモロジカル関手 \$H: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{H}}\$ を与える。

例 4.5.

- (1) \$(\mathcal{U}[-1], \mathcal{V}[1]) = (t^{\leq 0}, t^{\geq 0})\$ が \$t\$-構造のとき、\$\tau^+\$ および \$\tau^-\$ は truncation に他ならず、\$H: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow t^{\leq 0} \cap t^{\geq 0}\$ はハートへの標準的なコホモロジカル関手に一致する。これがコホモロジカルとなることは [BBD] で知られている。
- (2) \$\mathcal{U} = \mathcal{V} (= \mathcal{C})\$ のとき、\$\tau^+\$ および \$\tau^-\$ はいずれも恒等関手であり、\$H: \underline{\mathcal{T}} \rightarrow \underline{\mathcal{T}}/\mathcal{C}\$ は剰余をとる自然な関手に一致する。これは [KZ] において、コホモロジカルになると示されている。

## 5. BUAN, MARSH の構成との関係

これまでに見たように、「 $t$ -構造のハート」と「クラスター傾部分圏による剰余」という二つの構成は、ねじれ対を用いて同時に一般化される．これら二構成のうち、クラスター傾部分圏による剰余を一般化する構成が Buan と Marsh により与えられた．

**定理 5.1** ([BM, Theorem 5.1]).  $k$  を体とする． $\mathcal{T}$  を Hom-有限で Krull-Schmidt な  $k$ -線型三角圏で Serre 関手を有するものとする． $\mathcal{T}$  のリジッドな対象  $T \in \mathcal{T}$  に対し、 $\mathcal{X}_T = (\text{add}(T))^\perp$  と定めるとき、剰余  $\mathcal{T}/\mathcal{X}_T$  は整プレアーベル圏 (integral category) となる．系として、正則射による局所化でアーベル圏  $(\mathcal{T}/\mathcal{X}_T)_{\mathcal{R}}$  が得られる．ただしここで、 $\text{add}(T) \subseteq \mathcal{T}$  は  $T$  の有限直和の直和因子全体のなす充満部分圏．

**注 5.2.**  $T \in \mathcal{T}$  がクラスター傾対象ならば特にリジッドであり、また  $\mathcal{X}_T = \text{add}(T) \subseteq \mathcal{T}$  はクラスター傾部分圏となる．この点で、 $\mathcal{X}_T$  はクラスター傾部分圏を一般化したものとみなすことができる．

この構成で Buan と Marsh が用いたのは Rump による結果である．[R] において、任意の整プレアーベル圏から、正則射による局所化でアーベル圏が得られることが示されている．以下、[R] から抜粋して紹介する．

**定義 5.3.**

- (1) 加法圏  $\mathcal{A}$  が プレアーベル (preabelian) であるとは、任意の射の核と余核が存在するときをいう．
- (2) (i) プレアーベル圏  $\mathcal{A}$  が 左半アーベル (left semi-abelian) であるとは、 $\mathcal{A}$  における任意の引き戻し

$$(5.1) \quad \begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{\alpha} & B \\ \beta \downarrow & \square & \downarrow \gamma \\ C & \xrightarrow{\delta} & D \end{array}$$

で、 $\delta$  が余核射 (すなわち、なにか射  $\lambda: C' \rightarrow C$  を用いて  $\delta = \text{cok}(\lambda)$  と表せる射) ならば  $\alpha$  が全射となるときをいう．

- (ii) 右半アーベル圏 (right semi-abelian category) も、押し出しを用いて双対的に定義する．
- (iii) 左半アーベルかつ右半アーベルのとき、単に半アーベル (semi-abelian) であるという．
- (3) (i) プレアーベル圏  $\mathcal{A}$  が 左整 (left integral) であるとは、 $\mathcal{A}$  における任意の引き戻し (5.1) において、 $\delta$  が全射ならば  $\alpha$  も全射となるときをいう．
- (ii) 右整 (right integral) 条件も、押し出しを用いて双対的に定義する．
- (iii) 左整かつ右整のとき、単に整 (integral) であるという．

特に、加法圏  $\mathcal{A}$  に対する性質の間に

$$\text{abelian} \Rightarrow \text{integral} \Rightarrow \text{semi-abelian} \Rightarrow \text{preabelian}$$

という関係が成り立つ．次が Rump により示された．

**定理 5.4** ([R]).  $\mathcal{A}$  が整のとき、 $\mathcal{A}$  を正則射 (= 全射かつ単射) の全体のなす射のクラス  $\mathcal{R}$  で局所化して得られる圏  $\mathcal{A}_{\mathcal{R}}$  はアーベル圏となる．

従って整プレアーベル圏が与えられれば、局所化により「自動的に」アーベル圏が得られることになる．

## 6. ねじれ対のペアへの拡張

ここで, Buan と Marsh により得られた次の観察に注目する .

**補題 6.1** ([BM, Lemma 1.2]).  $\mathcal{T}$  を, 定理 5.1 と同じ仮定を満たす三角圏とする .  $T \in \mathcal{T}$  がリジッドのとき, 次が成立する .

- $(\text{add}(T), \mathcal{X}_T)$  および  $(\mathcal{X}_T, \mathcal{X}_T^\perp)$  はともに  $\mathcal{T}$  上のねじれ対をなす .
- $\mathcal{T}(\text{add}(T), \mathcal{X}_T^\perp[1]) = 0$  が成立する .

これをもとに, 余ねじれ対による構成を少し修正して, Buan と Marsh の構成を一般の三角圏上で扱うことを考える . 目標となるのは, 「余ねじれ対からのアーベル圏の構成」と「Buan と Marsh による構成」の同時一般化である . Rump の結果から, 整アーベル圏の構成を目指せばよい .

**設定 6.2.** 三角圏  $\mathcal{T}$  上の余ねじれ対のペア  $(S, T)$  および  $(U, V)$  が, 条件

$$\text{Ext}^1(S, V) = 0$$

を満たすとする . このとき,  $\mathcal{T}$  の部分圏の列

$$(6.1) \quad \begin{array}{ccc} & \mathcal{T}^+ & \\ \mathcal{T} \supseteq & & \supseteq \mathcal{H} \supseteq \mathcal{W} \\ & \mathcal{T}^- & \end{array}$$

を  $\mathcal{W} = \mathcal{T} \cap U$ ,  $\mathcal{T}^+ = \mathcal{W} * V[1]$ ,  $\mathcal{T}^- = S[-1] * \mathcal{W}$ ,  $\mathcal{H} = \mathcal{T}^+ \cap \mathcal{T}^-$  により定義する .

**定理 6.3** ([N2, Theorem 5.4, 6.3]).  $(S, T), (U, V)$  を設定 6.2 のとおりとするととき, 次が成立する .

- (1) 剰余  $\mathcal{H}/\mathcal{W}$  は半アーベル圏となる .
- (2) さらに, 条件

$$(6.2) \quad U \subseteq S * T \quad \text{または} \quad T \subseteq U * V$$

が満たされるならば,  $\mathcal{H}/\mathcal{W}$  は整となる .

**例 6.4.** 以下の場合には, 条件 (6.2) を満たすねじれ対のペアが得られる .

- (1)  $(U, V)$  が  $\mathcal{T}$  上のねじれ対のとき,  $(S, T) = (U, V)$  とおくと設定 6.2 の条件が満たされる . このペアに付随する部分圏の列 (6.1) は, 定理 3.2 の部分圏の列 (3.1) に一致 . 特に, 定理 3.2 により  $\mathcal{H}/\mathcal{W}$  はアーベル圏となる .
- (2)  $\mathcal{T}$  が定理 5.1 の仮定を満たす三角圏,  $T \in \mathcal{T}$  がリジッドな対象のとき,  $(\text{add}(T)[1], \mathcal{X}_T), (\mathcal{X}_T, \mathcal{X}_T^\perp[-1])$  は設定 6.2 の条件を満たす . このとき (6.1) は

$$\begin{array}{ccc} & \mathcal{T} & \\ \mathcal{T} = & & = \mathcal{T} \supseteq \mathcal{X}_T \\ & \mathcal{T} & \end{array}$$

のようになり,  $\mathcal{H}/\mathcal{W} = \mathcal{T}/\mathcal{X}_T$  となる .

- (3)  $(S, T), (U, V)$  が設定 6.2 の条件を満たすペアとする .  $(S, T)$  もしくは  $(U, V)$  のいずれか一方が余  $t$ -構造ならば, 条件 (6.2) が満たされる .

## REFERENCES

- [AN] Abe, N.; Nakaoka, H.: *General heart construction on a triangulated category (II): associated homological functor*, Appl. Categ. Structures, **20** (2012) no.2, 161-174.
- [BBD] Beilinson, A. A.; Bernstein, J.; Deligne, P.: *Faisceaux pervers* (French) [Perverse sheaves] Analysis and topology on singular spaces, I (Luminy, 1981), 5–171, Astérisque, **100**, Soc. Math. France, Paris, 1982.
- [BM] Buan, A. B.; Marsh, R. J.: *From triangulated categories to module categories via localization II: calculus of fractions*, J. London Math. Soc. (2012) doi: 10.1112/jlms/jdr077.
- [IY] Iyama, O.; Yoshino, Y.: *Mutation in triangulated categories and rigid Cohen-Macaulay modules* (English summary), Invent. Math. **172** (2008) no. 1, 117–168.
- [KR] Keller, B.; Reiten, I.: *Cluster-tilted algebras are Gorenstein and stably Calabi-Yau*, Adv. Math. **211** (2007) no. 1, 123–151.
- [KZ] Koenig, S.; Zhu, B.: *From triangulated categories to abelian categories: cluster tilting in a general framework*, Math. Z. **258** (2008) no. 1, 143–160.
- [N1] Nakaoka, H.: *General heart construction on a triangulated category (I): unifying t-structures and cluster tilting subcategories*, Appl. Categ. Structures, **19** (2011) no.6, 879-899.
- [N2] Nakaoka, H.: *General heart construction for twin torsion pairs on triangulated categories*, arxiv: 1111.1820
- [R] Rump, W.: *Almost abelian categories*, Cahiers Topologie Géom. Différentielle. Catég. **42** (2003) no. 3, 163–225.

DEPARTMENT OF MATHEMATICS AND COMPUTER SCIENCE, KAGOSHIMA UNIVERSITY, 1-21-35  
KORIMOTO, KAGOSHIMA, 890-0065 JAPAN  
*E-mail address:* nakaoka@sci.kagoshima-u.ac.jp